

カリキュラム・マネジメントの定義 の発展的更新に向けて

大阪教育大学 田村知子

1. はじめに

- 「カリキュラム・マネジメント」が平成29/30年度改訂の学習指導要領において明記されたことは、学校の裁量を活かした教育の質向上に向けた重要な一歩である。
- 教育課程の構造的改善と学校全体の協働的取組を支える視点として、一定の前進を示している。
- しかしながら、現行の定義（の受け止められ方）には、現場での柔軟な実践や創造的な応答を妨げうる課題が残されている。

2. 現行学習指導要領における 「カリキュラム・マネジメント」の位置づけ

総則

第1 小学校教育の基本と教育課程の役割

4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、
教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的
な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価して
その改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は
物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなど
を通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に学校の教育活
動の質の向上を図っていくこと（以下、「カリキュラム・マネ
ジメント」という。）に努めるものとする。

編みかけ部分は、いわゆる「三側面」

3. 現行定義における現場の受け止めの主な課題

- ① 「教科等横断的な視点」が強調され、
「カリマネ＝教科等横断」と誤解されやすい
- ② 深い学び、系統性、学校の学びと実生活や地域との接続、
時数・時間割の工夫などが捉えにくい
- ③ 子どもの学びの実態把握とその背景要因への洞察が弱い
→ 実態を適切に把握し、背景にある要因を考察すること、そして目的・目標を教職員間で納得感をもって共有することなくしては、「**多様な子どもたちを包摂する柔軟な教育課程**」の実現は困難である。
- ④ 「評価・改善」の方法がPDCAに限定されがちで柔軟性を欠くことがある
- ⑤ 「やらされ感」が強まり、教師の創造性や主体性が阻害される
- ⑥ 「カリマネ」という用語の拡張的使用が進む一方、
実質がブラックボックス化
- ⑦ 教師の（集団的）エージェンシー（自律的判断・行動）への視点が弱い

4. 現職教員の受け止め方の実態と変容（典型例）

X教職大学院「カリキュラム・マネジメントの理論と実践」の講義の事前・事後の変化
分析対象回答数：計154人分（2020年度:48人, 2021年度:60人, 2022年度:46人）

【 before 講義前の理解 】	【after 講義後の理解】
「カリマネ＝管理職の仕事」 「難しい・苦手・他人事」 「子どもの姿が見えない」 「やらされる」 「新たな業務が増える」	「自分たちでつくる」 「教職員全体で担う」 「子ども・地域と共に構築するイメージ」 「楽しく・創造的」 「やってみたいと思えるもの」

→現場での誤解や心理的抵抗の根底には、定義の表現・構造、あるいは伝達の過程で生じる理解の一面的な受け取りに起因する課題がある。

5. カリキュラム・マネジメントの創造的展開

能代市（秋田県）

- ・ 第四小学校：「教育目標と日常をつなぐ」全員で育てたい資質・能力を設定
→参画意識の向上。
- ・ 第二中学校：「教科の壁を越えてつなぐ」
→教師も生徒も各教科等の関連を見出し生徒の中で「知の総合化」が起こり始めた
- ・ ニツ井中学校：「学校と地域をつなぐ」学校教育目標を学年部や指導部の経営案の重点目標に反映。目標実現を意識して地域とも連携・協働。
→教職員の参画意識向上。授業研究会が「自分事研究会」へ。

棚倉町（福島県）

- ・ カリマネの「八つの手法（意識化，具体化，対話で育む，自分で決める，評価サイクル，レバレッジポイント，個人シート，共有化）」を開発。学校の実態に応じて，その本質を押さえて取り組む。（例：「意識化」の本質＝子供の過去も現在も大切にして，子供に身につけさせたい力を設定し，意識させること）
→「子供の学びの姿」がレバリッジポイント。保護者・地域にも，それを発信，共有することで，教育課程の編成・実施・評価・改善の全てに好影響。

5. カリキュラム・マネジメントの創造的展開

山口県

- 地域住民と教職員や児童生徒の熟議，全公立中学校区9年間の「学校・地域連携カリキュラム」策定。「学力向上推進リーダー」による支援。
- 周南市立徳山小学校：カリマネは当たり前という意識が根付き，評価・改善の視点が日常化。授業の質の向上につながる好循環。
- 宇部市立上宇部中学校：生徒の主体性，地域の一員との自覚。学びの質の向上。業務の効率化。

大阪府

- 忠岡市立忠岡小学校：取り組みを共有する「ICT掲示板」「まなびレポート」，年間指導計画を俯瞰した見直し，児童の縦割り活動など
→教職員が同じ方向を向いた指導，全ての教育活動のつながりの意識化，児童同士の同学年・異学年のつながり，児童が表現できる場の増加
- 田尻町立中学校：生徒の実態を分析し「逆境力・社会実践力」の育成のために探究学習を充実することを教職員全体で共有。町役場の各課と連携しSDGs学習，課題解決，キャリア教育
→生徒，教職員，地域を巻き込み「町に対する想い」を実現し，更なる課題発見・解決につながる探究のサイクルと生徒の達成感。子供のアイディアの尊重や子供主体の授業づくり。

6. カリキュラム・マネジメントを 〈創造的営み〉として捉え直す

ー現職教員の声から見える，次期学習指導要領へのヒント

1. トップダウン的な誤解からの転換
→ 「管理職の仕事」から「チームで行う・若手も担える」へ
2. 目的の再認識
→ 「業務の整理」から「子ども中心の教育課程の再構築」へ
3. 創造的な営みとしての再定義
→ 「苦手・遠い存在」から「楽しい・やってみたいこと」へ
4. 子どもの姿が見えるように
→ 「大人がすること」から「子どもの学びのための営み」
「子どもの参画も可能な営み」へ

7. 次期学習指導要領における「カリキュラム・マネジメント」の発展的更新に向けて

【1. 現行定義の意義と限界】

- ・「学校の裁量を活かした教育の質の向上」や「学校全体での協働的取組」を示した意義は大きい。
- ・一方で「教科等横断」の強調や、子どもの姿が見えにくい表現などが、誤解や形式化を生みやすい。

【2. 現場の実感から見える改善の方向】

- ・現場教員は、カリマネを「子どもとともに創造する営み」と捉え直し始めている。
- ・定義もまた、子ども理解・地域性・柔軟性・教師の専門性と同僚性を基盤としたエージェンシーを内包するものへと更新されるべきである。

【3. 今後の議論に期待すること】

- ・教科等横断やPDCAといった枠にとどまらず、実際の教育課程づくりの営みを豊かにすることを促す定義が求められる。
- ・「やらされるマネジメント」から「ともに創るマネジメント」への転換に資する議論が必要である。